

# 東日本大震災から15年 被災者の尊厳から考える防災と復興

第180回ふじのくに防災学講座

内尾太一  
公立大学法人 静岡文化芸術大学  
文化政策学部 准教授

## 名前なき栄誉につつまれ 光輝なき偉大さを秘め 報酬なき尊厳を保ちつつ

ヴァルター・ベンヤミン（ドイツの思想家・哲学者）

この一節を1995年の阪神・淡路大震災の後で詩人・季村敏夫が  
被災者に向けた言葉として紹介した（季村 1997）

### 本講座の目的

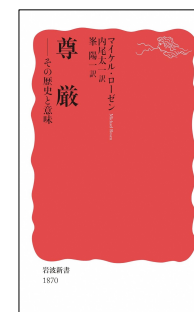
- 3.11の経験から、災害と「被災者の尊厳」を捉え直す。
- 支援・復興・記憶のあり方を、現場の視点から考える。

#### 【講師著作】

- 『復興と尊厳——震災後を生きる南三陸町の軌跡』（東京大学出版会、2018）
- 『尊厳——その歴史と意味』（マイケル・ローゼン著、共訳、岩波新書、2021）
- 「復興の倫理／被災者の尊厳」『災害復興学事典』（朝倉書店、2023）
- 「自然災害と被災者の尊厳」『人間の安全保障 東大駒場15講』（東京大学出版会、2024）

### 尊厳とは何か？

- その響きから、**人間の生における重要な何か**だと推察できるが、それが意味するところはやや曖昧。
- 辞書的には、「**尊く、厳かで、侵しがたいこと**」
- ローゼンの分類：①**本質としての尊厳**（人間として誰しもが持つ価値）、②**地位としての尊厳**（日本語では「威厳」のニュアンス）、③**態度としての尊厳**（敬意に値する振る舞い）。



Image

震災直後の被災者の秩序ある行動。

ローゼンは、尊厳の第3の意味  
「態度としての尊厳」について  
「**苦しみの中の静けさ**」  
とも捉える。

AFP BB NEWS, 2011年3月15日 <https://www.afbb.com/articles/-/2790613>

## はじめに： 災害発生直後の被災者の尊厳

### 令和6年能登半島地震

- 2024年1月1日、石川県能登半島を震源とするマグニチュード7.6の地震が発生。
- 最大震度7が観測され、大津波警報が発せられた。
- 発生から2年後、死者・行方不明者700人。避難者数は最大5万人となっている。

Image

<https://weathernews.jp/s/topics/202401/020015/>

Image

<https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/rnote>

### 被災者の尊厳に関する報道

排泄や  
生理衛生

遺体の処理

これら二つの尊厳の側面は、現代日本の被災地に限らず、  
国連組織の災害対応の中に組み込まれている。

Image

<https://www.niigata-nippo.co.jp/articles/-/357300> (リンク切れ)

Image

<https://www.hokkoku.co.jp/articles/gallery/1284367?ph=1> (リンク切れ)

## 災害発生直後の被災者の尊厳①

- UNFPA（国連人口基金）が提供する Dignity Kit（尊厳キット）。
- 災害が発生した際、女性と女児のリプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）のニーズと保護が目的。

Image

Image

<https://www.usaforunfpa.org/whats-in-a-unfpa-dignity-kit/>

## 災害発生直後の被災者の尊厳②

- WHO（世界保健機関）の下部組織PAHO（汎米保健機関）のフィールドマニュアル：災害発生後の遺体の管理（初動対応）について。
- マニュアルの第一目的：遺体の適切かつ尊厳ある管理を促進すること。
  - ❑ 遺体の身元確認。
  - ❑ 遺体回収後はできるだけ涼しい場所に保管。
  - ❑ 直射日光、屍肉食動物、人目から保護。

Image

<https://iris.paho.org/handle/10665.2/31295>

## 災害時の尊厳をめぐる問い

- **基本的な衛生ニーズ**や**遺体の処理**が尊厳に関わることは明らか。
- しかし、尊厳を「羞恥心の喪失」や「亡骸への道徳的責任」に限定するなら、対策はすでに明確：
  - 多様なニーズに応じた備蓄の確保
  - 犠牲者発生を想定したマニュアル
  - 訓練による対応力の向上
- では、これだけで「被災者の尊厳」は守られたと言えるだろうか。

## 災害復興と被災者の尊厳

Image

芥川龍之介 「大正十二年九月一日の大震に際して」

芸術は生活の過剰ださうである。

成程さうも思はれぬことはない。

しかし人間を人間たらしめるものは常に生活の過剰である。

僕等は人間たる尊厳の為に生活の過剰を作らなければならぬ。

更に又巧にその過剰を大いなる花束に仕上げねばならぬ。

災害復興過程において、

**生存**が確保され、

**生活**が維持されてなお、

満たされない何か、

損なわれていく何かがあるとしたら

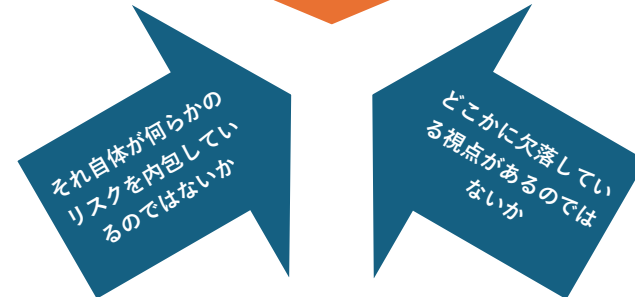
それは**尊厳**の問題である。



今日の標準

「被災者のため、  
人間のため」と差  
し伸べられる復興  
支援や政策

cf. 福田徳三「人間復興」  
(1923年の関東大震災後)



## 3.11の被災地におけるフィールドワーク



『復興と尊厳：震災後を生きる南三陸町の軌跡』

(2018年11月22日 東京大学出版会)

山陽新聞、週刊読書人、読売新聞、朝日新聞、河北新報、日本農業新聞、図書新聞などで紹介。

- 同書の事例をまず共有し、災害復興のリアリティを感じ取る。
- 同書でも探求してきた「被災者の尊厳」についてより豊かな想像力を得る。



## 調査地の紹介

「津波常習地に生きる人々」



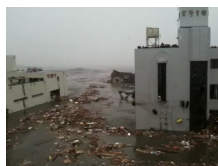
## 宮城県南三陸町の歴史・自然・文化

- **津波の歴史**：明治三陸地震（1896）、昭和三陸地震（1933）、チリ地震津波（1960）、東北地方太平洋沖地震（2011）。
- **地理的脆弱性**：①地震多発地帯、②V字の湾が津波の高さを増大。
- **豊かな自然**：海と山が近く、動植物が多様。漁業・林業が盛ん。
- **人々の生活**：1970年代に全国に先駆けてギンザケの養殖。チリとの国際交流（1990～）。震災前からグリーンツーリズムを推進。
- **津波防災**：最大4.6mの防潮堤。2010年5月24日（チリ地震津波から50年）町内では大規模な避難訓練が行われた。



## 東日本大震災による被害

- **震災発生直後の数日**：人々が最も深刻な恐怖と欠乏に晒された期間。
- **南三陸町の被害**：震度6弱の地震、最大23.9mの津波。死者 620人、行方不明者212人（17,666人のうち）。住家全壊3,143棟、半壊178棟。



震災当日（調査協力者提供）



震災翌日（調査協力者提供）



災害派遣活動に取り組む自衛隊（2011年5月4日）

## 被災地支援を通じて

- 大学院生時代にNPO法人を立ち上げ、震災直後から宮城県北部の仮設住宅で暮らす子どもへの教育支援に携わる。
- 2016年3月まで続いた支援とフィールドワークを通じ、災害復興を考える軸として「被災者の尊厳」を探究。

Image

## 事例研究①

### 被災地支援と痛みなき抑圧

#### 草の根の支援による負債

- 震災直後、市民による救援物資や無償のケアが被災者の大きな支えとなった。
- 支援は、避難所から仮設住宅への移行後も数年間継続した。
- 時間の経過とともに、支援は量から質へと変化：
  - 中古品 → 新品へ
  - 郵送 → 手渡しへ
  - 支援者主導 → 被災者参加型イベントへ



Image

#### フィールドで見たもう一つの風景

震災から1年以上が過ぎたある日、私の携帯電話が鳴った。相手は地元の支援者だった。

「市内の倉庫に、貰い手のつかなかった物資が残っているから、必要なものを持って行っていいよ」

報告者は車を走らせて倉庫へ向かった。重い鉄の扉を開けた瞬間、目に飛び込んできたのは——**ある物資**が、山のように残されていた光景だった。

Image

## 行き詰まる支援活動



(仮設住宅に入ってから1年、2年が経過)

- 被災者による自己批判：「支援慣れ」や「もらいっぱなし」
- 仮設住宅周辺の地域住民による噂：「支援をもらって昼はパチンコ、夜は居酒屋」

→ 仮設住宅の人々は支援を受けることに敏感になっていった。

## 被災者へのインタビュー①（震災発生から2年半）

本当にありがたいね。全国からこんなにご支援いただいて。だけど、**与えられたものを食べて、与えられたものを着て生きていだけなら私らは家畜と変わらない**。私らはそろそろ被災者から復興者にならないといけない。[内尾 2018：110]

(補足) 尊厳の侵害はしばしば、対象を人間以下の存在とみなすような憎悪表現を伴う。自らを「家畜」同然と卑下することもまた本人の尊厳の感覚と深くかかわっている。

## 被災者へのインタビュー②（震災発生から2年半）

今、被災者って呼ばれてもあまりピンとこないですけど、世間のイメージだと**通常の人よりもランクが下**って感じがしてましたね。**価値が下がった**というか。なんか被災者って言葉はもう支援とセットになってるから。[内尾 2018：111]

(補足) 上記の表現からは、前近代社会における尊厳が、階層秩序に基づき一部の人々にしか適用されていなかったことや、尊厳の語源“dignitās”が「価値」を意味していたことが想起される。

## 社会的に構築される被災者像

- 震災直後：**被災者**がいるから**支援者**がいた。
- 転倒していく図式：支援の長期化とともに、**支援者**がいるから**被災者**がいる（支援を受けている人々が被災者、という認識）
- 震災直後は、被災者＝**多くを失った人々**であったはずが、支援の長期化によって、被災者＝**多くを貰った人々**に。

**この状況をつくりだしていたのは他ならぬ私たち支援者だった。**

## 尊厳の回復にどう関わるか

- **被災者からの返礼（ヒント）**：ある日、仮設の住民から大量のツナ缶（支援物資）を貰った。支援者として、被災者からの贈り物を受け取ることの葛藤を経て、徐々に一方的な支援から双方向的な関係へと発展。



## 被災者へのインタビュー③（震災発生から2年半）

一人間としてもらってばかりでなくて、何か生み出さないと**生き甲斐**を感じられないですね。元々この地方は、家の縁側で近所の人を茶菓子、漬け物などで互いにもてなしかう、お茶っこ文化がありますし。もらって豊か、というよりも、あげて豊か。故郷が田舎の浜の方だから特にそう考えますよ。**自尊心**もあるから。[内尾 2018：119]

（補足）ここでは、地域文化に由来する互酬性の復活が、被災者の尊厳と深く関わっている。何が「人間らしい暮らし」かは、文化的なコンテクストにも左右される。

## 事例研究②

### 防潮堤と国家権力

## 将来の災害をどのように防ぐか

- 生活再建が進むと、復興はまちづくりの段階へ。
- 主体は支援者ではなく被災者自身。
- 「自分たちのまち」として当事者意識が高まる。
- 暮らし・観光・防災などについて、住民の意見交換が活発化。
- その中で、**巨大防潮堤の建設**が最も重要な議題の一つとなった。



## 巨大防潮堤の受容プロセス

### 行政の防潮堤建造計画：

想定宮城県沖地震のためにT.P.+8.7m前後の防潮堤を湾岸につくる。

町内外からの批判：①生態系や関連産業への影響、②高額な維持管理費、③科学的根拠への不信、④海が見えない不安、⑤津波避難の教訓の風化、⑥新しい町への愛着の薄まり、など。

しかし、これだけ懸念の声があがってもその計画は実行された。

## 被災者へのインタビュー②（震災発生から3年）

南三陸に帰ってきてはじめての頃、行政の防潮堤に関する説明会にいったんですよ。決められた高さについて「シミュレーション」って言葉を連発してましたね。それで疑問を煙に巻くような。（中略）だから、この際、直接聞いたんですよ、「この場で『反対』っていったら計画が変わる可能性あるんですか」って。そしたら「いや、ないです」ってはっきり。[内尾 2018：154]

（補足）防潮堤についての住民説明会では、**自然科学**の知見が出席者に安心を与え  
るというよりは、反論を封じる決定的な論拠として用いられていた。

## 被災者へのインタビュー①（震災発生から3年）

新しい防潮堤の高さ8.7mという数字を知ったのは、2012年の夏頃の住民説明会でした。最初、**平地にはもう人は住まないのになんでそんな高さ**を、と内心思っていた人は多かったと思います。でも、「これには科学的根拠があるんです」、と言われると、「ああそうですか」、とそれを覆すほどの反対の声は上げにくいですね。[内尾 2018：151]

（補足）多くの被災地において、津波の浸水域は**法律**で災害危険区域に指定され、防潮堤の建造による安全確保とその背後地の整備はセットで進められていた。

## 国民の保護をめぐる論理

- 保護：トップダウン型アプローチ  
⇔ 草の根の支援（事例①）
- システマティック・予防的。国家の防潮堤建設政策はその典型
- 「国民の**生命・身体・財産**」を守る
- 残された柱：**尊厳**  
→ 文脈依存的（地域社会に根ざす  
「人間らしい」暮らしとは？）



かつて海岸線の景観をPRしていた町は、海の生物多様性や持続可能な養殖漁業を通じて地域の魅力を再発見。



## 事例研究③

### 記憶の保存と被災地のこれから

- 震災の死者：震災発生後、最も早く姿を消しながら、生者が「被災者」でなくなった後も、震災の事実を証明し続ける存在。
- 支援活動が縮小し（事例①）、町の復興が進むにつれて（事例②）、むしろ存在感を増し始める。

Image

阪神・淡路大震災（1997/1/17）の追悼の集い 2021  
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210117/k10012818961000.html>

Image

中越地震（2004/10/23）復興記念行事 2020  
<https://www.city.nagaoka.niigata.jp/shisei/cate01/sinsai/1023.html>

### 死者の尊厳と災害死の両犠牲

- 震災直後は、捜索から遺体の発見、丁重な扱い、火葬・納骨へと至る一連の過程を踏むことで、死者の尊厳は保たれていた。
- 災害死は、判断ミスによる「失敗例」とされる一方、その死が教訓として後世に活かされる「尊い犠牲」とも捉えられる。死を無駄にしまいとする生者の努力が、今日における死者の尊厳を支えている。（例：津波てんでんこ）



### 震災遺構をめぐるジレンマ （南三陸町防災対策庁舎）

- 町の危機管理の中枢として建てられた耐震性の高い行政庁舎（海から約500m）で、43人が犠牲となった。
- 24歳の女性職員が、最後まで防災無線で避難を呼びかけ続けて亡くなった事実は、象徴的な出来事として広く注目を集めた。



Image

- その死は、職責を全うした象徴的な出来事として共有され、創作や教材にも用いられた。
- 一方で、震災死を美談化すべきではないという批判も広がり、賛否両論を伴う社会的議論を生んだ。

ある県で2012年3月11日に発行された道徳教育指導資料集  
<https://www.pref.saitama.lg.jp/g2204/kokoronokizuna-bamene.html> (リンク切れ)

- 2011年：3.11で43人が犠牲／遺族感情に配慮し、町が防災対策庁舎の**解体方針を表明**
- 2012年：遺族間で解体・保存の意見が分裂／一部遺族が町長を告訴 → **現場検証の必要性**が生じる
- 2013年：宮城県知事「首長に判断を委ねるのは酷」／国が**保存費の一部負担**を表明／**震災遺構有識者会議**発足
- 2015年：有識者会議「**保存すべき価値あり◎**」／2031年までの県有化案をめぐる町民投票で**約6割が保存を選択**し決着

## 保存を求めた遺族の語り（2014年7月）

防災庁舎は今でも、毎日たくさんの人々が訪れて手を合わせて去っていきます。でも、彼らは、**あの庁舎で亡くなった人だけのために祈っているわけではないと思うんですよね。町すら飛び越えてスケールの大きい全体的な津波の犠牲者に。**そう考えたとき、一時の遺族の感情に任せて壊してしまっ、後で後悔するようなことになるのは避けたいと思いました。〔内尾 2018：192〕

## 解体を求めた遺族の語り（2020年3月）

宮城県知事にも解体を求める意見を伝えました。**自分の子どもが亡くなった建物が残されるのはどういう気持ちになりますか？**と。この地区の遺族は、防災庁舎の前では手を合わせない。防災庁舎を見たくないから、ぐるーっと遠回りする人もいました。

この地区にはそれまで祈りの場がなかったんです。遺族は、**亡くなった人の刻まれた名前を触って「おれのばあちゃんだ」「隣のじいちゃんだ」**って思うんです。〔内尾 2021：186〕

- 解体を求めたその遺族は、町の中心から離れた地区の山間に**個人名を刻んだ慰霊碑**を建てた。
- 今日、防災対策庁舎は、**南三陸復興祈念公園の一部**となり、町外から多くの人々が訪れている。
- 生者と死者のつながり：**尊く厳かで侵しがたいもの**。
- これら二つの場所は、**災害死の個別性と公共性**をめぐって私たち自身の倫理的感受性を問うている。



## まとめ

### 被災者の尊厳について考える

- ① 尊厳は単なるスローガンではない：災害復興過程における問題や価値の所在を浮かび上がらせる**発見的な枠組み**。
- ② 尊厳の議論は発災直後に限られない：復興過程でも危機に晒され、その都度**ローカルな解決策**が導き出されていく。
- ③ 被災者の尊厳を考えること：**被災者が何を守ろうとし、何によって深く傷つくのか**を見定めるということ。

**失ったものも多かったけど、得られたものも多かった。**

**もしかしたら、そっちのほうが多かったかもしれないな。**

ある被災者